

# ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) についての一考察

(主に故郷サレム・小説スカーレット・レターズ・パブリッシングについて)

大 森 孝

はじめに

平成元年九月、図書館長職に就任し、館内の蔵書を調べる中で、58年に富山県魚津市の真成寺総代の金三津 三郎氏御寄贈の300冊余の洋書が、書棚に並べられてあるのを見、然も此等の洋書は、金三津氏御令息故俊明氏が<sup>(1)</sup>研究生生活を送る中で求められた貴重な書籍であり、又、御令息は残念にも34才の若さで、志半ばにして御他界の由、これ等の書籍を、真成寺の谷川寛徳、寛俊両上人の御尽力により、当図書館に寄贈された由、しかし、こうした貴重な洋書も、仏教関係の書籍ではない故、広く読まれることも少ないと考え、ここに紹介を兼ねて、研究書の大部分を占めるアメリカの作家ナサニエル・ホーソンについて、その一端を寄贈の文献を参照しながら述べてみる次第です。

---

ナサニエル、ホーソン (Nathaniel Hawthorne)<sup>(2)</sup> についての評伝は多く出されているが、その中で世界的に非常な評価を得ているアメリカの作家ヘンリー・ジェームス (Henry James)<sup>(3)</sup> の論説を中心に参照しながら、ホーソンの人間像の一端を考えてみたいと思う。先ずジェームスは、彼の経歴はシンプルなものであったと、次の様に述べている。

Hawthorne's carrer was probably as tranquil and uneventful one as ever told to a lot of a man of letters ; it was almost strikingly deficient in incident, in what may be called the dramatic quality.

Few men of equal genius and of equal eminence could have led, on the whole, a simpler life.

即ち、和訳すると「ホーソンの経歴は、多くの文学者達に語られているように、静かな波乱の少ないものであった。其れは、たとえ劇的な性質であると呼ばれるもの等の中にも、非常にイベント的なものが欠けていた。同じ様な天才の能力を持つ人々も、全体として、彼よりシンプルな生活を送る事は出来なかったであろう。」以上の様に述べているが、では彼は、如何なる具合に成長したのであろうか、ヘンリーは次の様に述べている。

It was passed, for the most part, in a small and homogeneous society in a provincial, rural community ; it has few perceptible points of contact with what is called the world, with the manners of his time even with the life of his neighbours.

即ち、「彼は地方の田舎の地域の小さい、同じ様な状態の社会で大部分を過した。所謂、世間や、彼の時代の風習や、隣人達の生活とさえ接触した点は、殆んどみとめられなかった。」

ジェームスは以上の様に述べているが、しかし、ホーソンの作品に対しては高い評価を表わしており、次の様に述べている。

Whatever may have been Hawthorne's private lot, he has the importance of being the most beautiful and most eminent representative of a literature. The importance of the literature may be questioned, but at any rate, in the field of letters. Hawthorne is the most valuable example of the American genius. Judging from present appearance, we will long occupy this honorable position.

即ち、「ホーソンの個人的運命が何であっても、彼は文学の最も美しい、最も際立った代表である事の重要性を持っている。文学の重要性については問題があるかも知れないが、とに角、学問の分野でホーソンは、アメリカ人の天才

の最も価値ある例である。現在の様子から判断して、彼は長く此の名誉ある地位を占めるであろう。」

尚、彼の非常に控えめな、デリケートな性格は、大まかなアメリカの生活状態と、自己の作品との不調和感に苦しんだと考えられるが、この事について、ジェームスは次の様に具体的に述べている。

Hawthorne, on the one side, is so subtle and slender and unpretending, and the American world, on the other, is so vast and various and substantial, that of the *Scarlet letter* and the *Mosses from an old Manse*, that we render him a poor service in contrasting his proportions with those of a great civilization. But our author must accept the awkward as well as the graceful side of his fame ; for he has the advantage of pointing a valuable moral.

即ち、「ホーソンは一方では、非常に弱く、頼り無く自信が無いようである。他方、アメリカ社会は、'スカーレット・レター' や 'オールドマンズフロム・モーイズ' の世界の様に、非常に広大で、種々で、実質的であるので、我々は、彼の役割と威大な文明の役割とを比較して、彼の働きを低く考える。しかし、我々の作家は、彼の名声の優美な面と同様に、控え目な面も受け入れねばならない。何故ならば、彼は貴重な教訓を示す利益を受けているからである。」次に、此の教訓について、彼はアメリカ文明と結びつけて、次の様に述べている。

This moral is that the flower of art blooms only where the soil is deep, that it needs a complex social machinery to set a writer in motion. American civilization has hitherto had other things to do than to produce flowers, and before giving birth to writers it has wisely occupied itself with providing something for them to write about.

即ち、「此の教訓は、人工の花は、土壤が深い場所だけに花を開くと云う事であり、作家を活動させるのには、複雑な社会機構を必要とすると云う事である。アメリカ文明は、これ迄に、花を作る事より以上に為すべき別の事柄を持っている。そして、作家を誕生させる前に、文明自身が作家達に書くべき事柄を旨く与えている。」

以上の様に述べているが、更に、彼が、故郷のニューイングランドから非常に影響を受けていると、次の様に述べている。

Out of the soil of New England he sprang in a crevice of that immitigable granite he sprouted and bloomed. Half of interest that he possesses for an American reader for analysis must reside in his latent New England savour. The cold, bright air of New England seems to blow through his pages, and these, in the opinion of many people, are the medium in which it is most agreeable to make the acquaintance of that tonic atmosphere.

即ち、「ニューイングランドの土壤の外に彼は飛び出し、堅い花崗岩の割れ目の中で、彼は芽を吹き花開いたのである。彼が、アメリカの読者に対し抱いている興味を分析してみると、其の半分は、彼の潜在的なニューイングランドの持味の中にあったにちがいない。ニューイングランドの冷たい、明るい空気は、彼の頁を通して吹いている様にみえる。そして、これ等は多くの人々の意見の中で、あの元気一杯の雰囲気に会うのが、非常に愉快になる媒介物となるのである。」

更に、ジェームスは、ホーソンの作品が、如何に故郷の匂がするかについて、次の様に述べている。

Hawthorne's work savours throughly of the local soil-it is redolent of the social system in which he had his being. Hawthorne sprang from the primitive New England stock ; ha had a very definite and

conspicuous pedigree.

即ち、「ホーソンの作品は、十分地方の土の匂がする。即ち、それは、彼が生活して居た社会組織を思わせる。ホーソンは、初期のニューイングランドの血統から出た。即ち、彼は非常にはっきりと、際立った血統であった。」

次に、彼の誕生について、具体的に考えてみたい。先ず、ジェームスは次の様に述べている。

He was born at Salem, Massachusetts, on the 4th of July, 1804, and his birthday was the great American festival, the anniversary of the Declaration of National Independence. He passed the greater part of his boyhood there, as well as many years of his later life. Salem has a physiognomy in which the past plays more important part than the present. I know not of what picturesqueness Hawthorne was conscious in his respectable birthplace, we must have felt at least that, of whatever, the elmshaded streets of salem were a recognizable memento.

即ち、「彼は1804年7月4日にマサチューセッツのサレムに生れた。彼の誕生日は、大きなアメリカの祭典、即ち、国家の独立宣言の記念日であった。彼は其処で、少年時代の大部分を、晩年の多くの年と同じ程度に過した。サレムは、過去が現在以上に重要な役割を演ずると云う特徴を有している。私は、ホーソンが彼の尊敬する誕生地に、どんな絵の様な美しさを意識していたかは知らない。我々は、少なくとも、何であれ、エルムの木が影を落とすサレムの街は、目につく記念物であると感じたにちがいない。」

彼がサレムで寂しい年月を過した事は考えられるが、更に、ジェームスは、彼の其処での生活の中に優しさと憎しみが混り合った感情があったと述べており、その事は、彼の代表的作品の「スカーレット、レター（緋文字）」のイントロダクションの中に見られる、と云っている。次に、其のイントロダクシ

ンの原文を記してみると、

"My native place, though I have dwelt much away from it, both in boyhood and in mature years—possesses, or did possess, a hold on my affections, the force of which I have never realized during my seasons of actual residence here. Indeed, so far as the physical aspect is concerned, with its flat, unvaried surface, covered chiefly with wooden houses, few or none of which pretend to architectural beauty; its irregularity, which is neither picturesque nor quaint but only tame; its long and lazy street, lounging wearisomely through the whole extent of the peninsula, with Gallows Hill and New Guinea at one end, and a view of the almshouse at the other—such being the features of my native town it would be quite as reasonable to form a sentimental attachment disarranged checker-board".

即ち、「私は故郷から離れて住んでいたけれども、故郷は少年時代になっても、大人の時代になっても、私の愛情の上に心の支えになるものであり、即ち、私が住みついた幾シーズン中、自分が今迄に気づかなかった影響力を持っているし、又、持っていたのである。実際、外形的面が考えられる限り、平面的な変化の無い面を持ち、主に木製の家々で覆われており、その家々も殆んど建築的美しさは見かけず、その不揃さも絵のように美しくもなければ、奇異でもなく単調に過ぎない。その長い、けだるい様な街は、一方の端にガローズヒルとニューギニア、他の端に養老院を眺めるから、半島全域を貫いて、疲れ、もたれかかっているように延びている。私の故郷の町の特徴はこの様なので、不揃いのチェッカー盤に心情的な執着心を抱く事は、全く理に合っているであろう。」

以上の様に、ホーソンは故郷に対して、複雑な心情を抱いていたと考えられる。しかし、ジェームスは、現在の故郷サレムについて、次のように説明して

いる。

The Salem of to-day has, as New England towns go, a physiognomy of its own, and in spite of Hawthorne's analogy of the disarranged draught-board, it is a decidedly agreeable one. Salem, at the beginning of the present century, played a great part in the Eastern trade ; it was the residence of enterprising shipowners who despatched their vessels to Indian and Chinese seas. It was a place of large fortunes, many of which have remained, though the activity that produced them was passed away.

即ち、「今日のサレムは、ニューイングランドの町等の様に、其の町の顔つきを持っている。ホーソンの不揃のチェッカー盤の推論にもかかわらず、町は大変心地よいものである。サレムは現世紀の初に、東方貿易に於て大きな役割を演じた。其れは、インドシナ海に彼等の船舶を送った冒険的な船主の住む所であった。其れは、財産を生み出した活動はなくなったけれども、多くの財産が残されている場所であった。」

以上の様に述べているが、成功した貿易者達は、貴族階級と呼ばれ、町全体が、ニューイングランドの他の町より豊かであった様である。ホーソンは其処の小学校に通うのであるが9才の時、ボールを足に受けて怪我をし、治るのに3年程かかったと云われている。尚、彼の通学した小学校について、ジェームスは次のように述べている。

His school, it is to be supposed, was the common day school of New England. -the primary factor in that extraordinarily pervasive system of instruction in the plainer branches of learning which forms one of the principal ornament of American life.

即ち、「彼の学校は、ニューイングランドの普通の昼間学校であったと考えられている。即ち、それは、アメリカ人の生活の主要な飾りの1つとなるよ

り、明白な学問の分野に於ける教育の非常に普及した組織の中の重要な要素であったと考えられる。」

彼は1818年、14才の時、メイン州の叔父の家で母と共に住む事になるのであるが、其処で、彼は非常な孤独感を味わうのであるが、しかし、彼は、孤独感を特別の感慨を以って味わうのであり、その方法として、彼は自然に接するようになるのであるが、この事について、ジェームスは、ホーソンの言葉を引用しながら次の様に述べている。

For a boy with a relish for solitude there were many natural resources, and we can understand that Hawthorne should in after years have spoken very tenderly of episode. "I lived in Maine like a bird of the air, so perfect was the freedom I enjoyed." During the long summer days he roamed, gun in hand, through the great woods.

即ち、「孤独に対する味わいを持つ少年にとって、多くの自然の富があった。そして、我々は、ホーソンが後年、エピソードについて非常に優しく話したことを理解できる。即ち、「自分は空の鳥のようにメインで暮した。私が楽しんだ自由は、その様に完全であった」。長い夏の日中は大きな森の中を、彼は手に銃を持って歩きまわった。」

尚、冬については、ジェームスは次の様に述べている。

He would skate until midnight, all alone, upon sebage Lake, with the deep shadows of the icy hills on either hand.

即ち、「彼は、交互に手の上に氷の岡の深い影を受けながら、セバゴ湖の上を、ずうっと独りで夜中迄スケートをしたものです。」

以上の様に、ホーソンの故郷サレム、及び、そこで過した彼の少年時代を、主に、述べて来たのであるが、次に、ホーソンの代表的作品、スカーレットレターに対しては、ジェームスは次の様に述べている。

The scarlet letter was in the Limited states a literary event of the



first importance. The book was the finest piece of imaginative writing yet put forth in the country. There was a consciousness of this in the welcome that was given it a satisfaction in the idea of America having produced a novel that belonged to literature, and to the forefront of it. Something might at last be sent to Europe as exquisite in quality as anything that had been received, and the best of it was that the thing was absolutely American ; it belonged to the soil, to the air ; it came out of the very heart of New England. It is beautiful, admirable, extraordinary. It has in the highest degree that merit which I have spoken of as the mark of Hawthorne's best things-an indefinable purity and lightness of conception, a quality which in a work of art affects one in the same way as the absence of grossness does in a human-being. His fancy, as I just now said, had evidently brooded over the subject for a long time ; the situation to be represented had disclosed itself to him in all its phases. When I say in all its phases, the sentence demands modification. In the Scarlet Letter there is a great deal of symbolism, there is, I think, too much. It is over done at times, and becomes mechanical ; it ceases to be impressive, and grazes triviality.

即ち、「スカーレット・レターは、限られた州の中では、最初の重要な文学上の出来事であった。その本は、想像的に書かれたものの中で、最も立派な作品であった。けれども、地方で発表された。其の作品が、歓迎された中に、文学や、その最前線に属している小説を、アメリカが生んだと云う考えの中に、一つの満足感が与えられたと云う意識があった。与えられていたものと、同じ様に立派な質の良いものが、終にはヨーロッパに送られたかも知れない。その作品の最も良いものは、其れが完全にアメリカ風であると云う事であった。其

れは、土壌や空気に属していた。其れは、ニューイングランドの心そのものから出て来た。其れは、美しく、尊敬すべきものであり、非凡なものであった。其れは、最も高い程度に、私がホーソンの最も良いと考えるもの、即ち、定義出来ない様な純粹さ、そして、思考の明るさ、又、作品の中で下品さを表示しないのと同じ様な方法で、人に影響し、人間の存在を左右する性質、こうしたものを目標として、私が話したあの秀れたものを持っている。

彼の思考は、私が今迄述べたように、明らかに長い間、その主題について考えていた。表示されるべき状況は、凡ての面に於て、彼に対して閉じていた。私が凡ての面について述べる時は、文は修飾語を必要とする。

スカーレットレターの中には、非常に多くの象徴主義がある。非常に多くあると思う。其れは時々度を越す。そして、機械的になる。其れは印象的になる事を止める。そして、平凡な事に触れる。」

以上の様に、ジェームスはスカーレット・レターに対しての感想を述べている。即ち、非常に秀れた立派な作品であるが、時々、作者の考えが、十分に表示出来ない面があると述べている。

次に、ランドル・スチュワーツ (Randall Stewart) の説を参照しながら、<sup>(4)</sup>ホーソンについて考えてみたい。

彼は、ホーソンが故郷サレムの生活について、友に書き送った手紙を、ホーソンの気持を表示したものであると、次の様に示している。

As to the Salem people, I really thought that I had been exceedingly good-natured in my treatment of them. They certainly do not deserve good usage at my hands after permitting me to be deliberately lied down-not merely once, but at two several attacks-on two false indictments-with hardly a voice being raised on my belief; and then sending one of the false witnesses to Congress, others to the Legislature and choosing another as the mayor. I feel an infinite

contempt for them-and probably have expressed more of it than I intended, for my preliminary chapter has caused the greatest uproar that has happened here since witchtimes. If I escape from town without being tarred and feathered, I shall consider it good luck, I wish they would tar and feather me ; it would be such an entirely novel kind of distinction for a literary man. And, from such judges as my fellow-citizens, I should look upon it as higher honor than a laurel crown.

即ち、「サレムの人々に関しては、私は彼等に対する自分の態度は、非常に親切であったと思った。彼等は、私をよく調べた後で、単に一度だけでなく、二度に渡る数個の非難、即ち、二度の偽りの起訴や、私の支持の声は、殆んど聞かれず、又、偽りの目撃者の一人を国会に送ったり、他の者達を州議会に送ったり、市長として他の者を選んだり、確かに私の手元で役立つような事はない。私は彼等に対して、非常な軽べつを感ずる。そして多分、私が思っていた以上の軽べつの感情を示している。なぜならば、私の序文が、魔女の時代（未開時代）以来、この場所でひき起された最も大きい騒動をもたらしたからである。もし私が、ひどく非難されずに町からのがれるならば、私は、それを運が良いと思うだろう。私は、彼等が私を非難してくれたら良いと思う。非難されずに町を出る事は、1人の作家に対して、全く変った種類の区別となるであろう。そして、この様な判断から、一市民として私は、その事を月桂樹の冠以上に高い名誉と考えるべきであろう。」

以上の様にホーソンは述べて、サレムの人々から、ひどく非難されるのが当然であるのに、比比較的良好的な待遇を受けた事に対し、外見上は感謝しているのである。しかし、心の中では決して愉快ではなかったようであり、この辺の事情について、スチュワーツは、次の様に述べている。

Hawthorne was understandably eager to get out of salem. His change

of residence at this time, however, was not so much caused as hastened by the unfriendliness of his neighbors, for in the preceding autumn he had engaged a house at Lenox, in the Berkshires, for occupancy during the coming summer. Pressed by the untoward development in salem. he moved his household possessions from 14 Mall street about the middle of April and installed his family with Mrs. Hawthorne's parents in Boston.

即ち、「ホーソンがサレムから、しきりに脱出しようとしていた事はもっともであった。此の時、彼が住居を変える事は、彼の隣人達の冷たさによって急がされると云う程ではなかった。なぜならば、前の秋に彼は、次の夏の間中住む為に、パークシェアーのレノックスに家を予約していたからである。サレムに於ける不適当な開発によって圧迫を受けて、彼は四月の中頃、14モール・ストリートから家族の財産を移した。そして、ボストンに居るホーソン夫人の両親と共に、彼の家族を落ち着かせた。」

更に、彼は5月に、レノックスの他の家に移るのであるが、彼は、そこでの生活に満足していたようであり、その辺の事情について、スチュアートは次の様に述べている。

Late in May the Hawthornes moved into the Little Red House at Lenox. The change was a happy one. Hawthorne was glad to be rid of politics and political strife. For a few weeks perhaps, he fought the old battles over again. He asked Burchmore to ferret out a suspected stratagem of the enemy's which was still undisclosed.

即ち、「5月の末に、ホーソン一家はレノックスのリトル・レッドハウスに移った。その転居は楽しいものであった。ホーソンは政治や、政治的論争から脱つることを喜んだ。二、三週間は多分彼は何回も古い慣習と戦った。彼はパークモアーに、尚、隠されている敵の疑わしい策略を探し出すように頼ん

だ。」

彼はレノックスで上述の様な生活を送るのであるが、次第に彼の心境にも変化を来たし、自信ある作家として名声を得るようになるのであるが、その事情について、スチュワーツは次の様に述べている。

The rancor gradually died away, and Hawthorne recovered his self-possession. Situated in the hills of Berkshire, he could once more mock at fate and care. His literary reputation was at last established beyond all cavil. Though he was still hard pressed for money, his new fame had improved his financial prospects. He could enjoy the inner satisfaction of artistic achievement. He was still free to give his entire energies to creative work.

即ち、「憎しみも次第に消えて、ホーソンは彼の落着きをとりもどした。パークシャーの岡に住んで、彼はもう一度、運命と気苦労をあざける事が出来た。彼の文学的名声は、ついに、凡ての非難を越えてつくられた。彼は、尚、金銭に対しては非常に苦しんでいたが、彼の新しい名声は、彼の財政的見通しを良いものにした。彼は芸術的功績について、内心の満足を楽しむ事が出来た。彼は、尚、創造的仕事に対して、彼の全精力を十分に与える事が出来た。」

次に、スカーレット・レター (The Scarlet Letter) については、スチュワーツはどの様に考えていたかについて、述べてみたいと思う。先ず、彼はこの事を書き終った時のホーソンの様子について、次の様に述べている。

Hawthorne finished The Scarlet Letter on February 3. 1850. On the evening of that day he read the latter part of the book to his wife who as always had religiously refrained from any inquiry or meddling during the process of composition. "It broke her heart," Hawthorne wrote to Bridge, "and sent her to bed with a grievous headache, which I look upon as a triumphant success." Of his own reactions on that

memorable evening, Hawthorne recalled several years later, "my emotions when I read the last scene of the Scarlet Letter to my wife, just after writing it-trying to read it, rather, for my voice swelled and heaved, as if I were tossed up and down on an ocean, as it subsides after a storm."

即ち、「ホーソンは1850年2月3日にスカーレット・レターを書き終った。其の日の夕方に、彼はその本の後の部分を、彼の妻に読んでやった。その妻は、常に、彼が小説を執筆中には、誠実に、何かの質問や、干渉する等の事を慎んでいた。ホーソンはブリッジに次の様に手紙を書いた。'其れは、彼女の心にショックを与えた。そして、ひどい頭痛で床につかされた。そして、其の事は自分はすばらしい成功と考える'。ホーソンは数年後に、あの記念すべき夕方の彼自身の反応を思い出した。'私が書き終ってすぐ妻に対してスカーレット・レターの最後の光景を読んだ時の私の感情は、丁度、自分が暴風雨の大海上で上下に動揺されるように、自分の声が高い調子で、唸るようであったので、むしろ、其れを努めて読もうとした'。」

以上の様にホーソンは、妻に対して読んだ時の感情を述べているのであるが、スチュアーツは、この感情について次の様に付加している。

The emotion attests the author's sincerity (if attestation were needed), the more so because Hawthorne was not in the habit of breaking down.

即ち、「其の感情は、もし証明が必要とされるならば、著者の真面目さを証明している。ホーソンは、落胆した習慣が無いので尚更である。」

スカーレット、レターは非常な名声を得て、2年間に6000部売れたと云われているが、反面、この本に対し、厳しい論評も見られるのであり、この点に関し、スチュアーツは次の様に述べている。

Two objections, however, were repeatedly expressed. One was that

the gloom of the Scarlet Letter was unrelieved. he felt the unmitigated gloom of the tale to be both an obstacle to popularity and an artistic defect as well. But if it was a defect, it was one which in this instance at least he had been powerless to correct.

即ち、「けれども、二つの異議がくり返し示された。一つは、スカーレット、レターの陰気さは、救いようが無いと云う事であった。彼は、物語の重々しい陰気さは、人気に対しての障害にも、同じ様に芸術的欠点にもなると感じた。しかし、もし其れが欠点であるとするならば、其れは此の場合、少なくとも、彼が訂正するだけの力が足りなかったと云う欠点であった。」

以上の論評は、彼に対して好意的にとれる論評であるが、更に、もっと強い論評を加えたものもあり、この事についてスチュアーツは、次の様に述べている。

The Scarlet Letter was enjoying something approaching a success of scandal. Hawthorne was not above relishing such attacks or taking satisfaction in their value as advertising. But he was not in sympathy with them as criticism, even though the novel's position on the moral question might, with some show of justice, be called equivocal.

即ち、「スカーレット・レターは、スキャンダルの成功に近いものを楽しんでいた。ホーソンはこの様な非難を楽しんでおり、又は、宣伝としての其等の価値に満足を感じていた。しかし、彼は、道徳的問題上での小説家の地位が、正義を示す点ではぼやけていると云われるとしても、批評としてのそれ等の事に同情的ではなかった。」

尚、ホーソン自身は、友人のフィールドに対して、次の様に述べている。

The Scarlet Letter is rather a delicate subject to write upon, but in the way in which I have treated it, it appears to me there can be no objection on that score.

即ち、「スカーレット・レターは、書き下すのにはかなり微妙な主題である。しかし、自分が其れを取り扱った方法の中で、自分には其の点については、何等の異議もありえないように見える。」

以上、スカーレット・レターについての論評を種々述べて来たのであるが、次に、スカーレット・レターの要旨を世界文学大系を参照しながら述べてみたい。<sup>(5)</sup>

彼の作品中最も高い地位を占めているが、一種の姦通小説と云えよう。人間及びその精神や愛の尊厳を知らない科学者のチリングリース、長い間の夫の留守中、学徳の誉れ高い牧師 デイムス・テイール と不義に陥り 女兒パールを生み、緋文字Aを胸につけ刑を受ける妻のヘスター・プリン、これ等登場人物の背景は、17世紀、植民地時代のニューイングランドである。正しく懺悔していないヘスターは、善行によって高められ、Aと云う緋文字は *Adulteres*（不義の女）から *Admirable*（賞賛すべき）、又は、*Angel*（天使）の頭文字Aを思わせるようになる。自分の罪を告白しない牧師も真実を求めて悩み、罪の意識は深まってゆく。ヘスターは罪に耐えて性格を強めてゆくが、牧師は罪を秘しているが為に、次第に破壊されてゆく。ヘスターが本当に罪を悔いるのは、牧師が群衆に罪を告白して死んでからである。しかし、最も赦し難いのはチリングリースの罪である。罪を犯した者の魂や、心理の反応を見ると云う行為が、復讐の手段となる。その相手がなくなれば、彼の生命も枯れる。結局、罪を犯したものが受ける報いは、魂への傷痕と社会からの疎外である。更に、作品中で象徴が、それぞれ深い意味になるまで高められている。

以上、ホーソンの故郷サレム、及び、彼の代表的作品のスカーレット、レターについて、その一端を述べた次第である。

次にホーソンは一時期雑誌の出版に関係したのであるが、この事について少し考えてみたい。

彼は「ユースフル、エンターテインング、ノーレッジ」誌の編集者になるので



あるが、この辺の事情について、アーリン・ターナー（Arlin Turner）の説を参照しながら述べてみたいと思う。<sup>(6)</sup>

先ず、ターナーは次の様に述べている。

Hawthorne became editor of the American Magazine of Useful and Entertaining knowledge with the issue of March, 1836, and with some help from his sister Elizabeth prepared the contents of six numbers. Though the editorship held no great promise, Pierce, Cilley, Bridge, and others of Hawthorne's friends were gratified to see him find profitable employment without turning his back on authorship.

即ち、「ホーソンは1836年3月発行のユースフルアンドエンターテイニングノレッジマガジンの編集者になった。そして、彼の姉のエリザベスのいくらかの助力で、シックスナンバーの内容の準備をした。編集者の地位は特別有望なものではなかったが、ピアースやシリイやブリッジや、他のホーソンの友人達は、編集者の地位を避けることもなく、利益のある仕事を彼が見つけたのを見て満足した。」

しかし、此の出版の仕事も順調には行かず、種々苦勞する事になるのであるが、この事について、次のようにターナーは続けている。

But the optimism was short-lived. The nature of the publication and the restrictions under which Hawthorne had to work began to gall him early; and further, his meager salary of \$500 a year immediately became delinquent. Samnel G. Goodrich, who had secured the position for him through his own connection with the publishers, the Bewick Company of Boston, made promises in regard to the salary which-so Hawthorne became convinced even before his first issue of the magazine appeared-he made no serious effort to fulfill.

即ち、「しかし、楽観主義は長く続かなかった。出版物の性質と、ホーソン

がその下で働かねばならなかった制限は、彼を早期にいらいらさせ始めた。そしてその上に、年500ドルの彼の乏しい給料は、直に遅れ始めた。ボストンの出版社ビックカンパニーとの関係を通して、ホーソンの為にその地位を確保したサニエル、ジ、グッドリッチは、サラリーについて保証をした。そこで、ホーソンは其のマガジンの最初の出版物が出る前からさえ確信するようになり、彼は大きな果すべき努力もしなかった。」

当時のホーソンのグッドリッチに対する感情を示すものとして、彼が姉のルイサアに当てた次の様な手紙がある。

I came here trusting to Goodrich's positive promise to pay me 45 dollars as soon as I arrived, and he has kept promising from one day to another ; till I do not see that he means to pay me at all. I have now broke off all intercourse with him, and never think of going near him. In the first place, he had no business ever to have received the money. I never authorized Bowen to pay it to him ; and he must have got it by telling some lie.

My mind is pretty much made up about this Goodrich. He is a good natured sort of man enough ; but rather an unscrupulous one in money matters, and not particularly trustworthy in anything.

即ち、「自分は到着するとすぐ、自分に45ドル払うと云うグッドリッチの積極的保証を信頼して此処に来了。彼が自分に全く給与を払う意思がないと自分分かる迄、ずうと彼は自分に保証を続けて来た。自分は今、彼との交際を中止している。そして、彼の近くに行こうとは決して考えない。彼は金を得るような仕事を持っていなかった。私はポーエンに、彼に対して金を払うようにと頼んでいなかった。そして、彼は何等かのうそを話す事によって金を得たにちがいない。私の心は、このグッドリッチについては、かなり心が定まっている。彼は十分善良な種類の人であるが、しかし、金の事については、かなり無

節操であり、何事にも特別に信頼の置ける人ではない。」以上の様に給与未払いの事について、グッドリッチに対しての苦情を述べているのであるが、更に、5月12日に別の姉のエリザベスに対して、次の様な手紙を書いている。

I did not receive a cent of money until last saturday, and then only twenty dollars; and, as you may well suppose, I have undergone very grievous vexations. Unless they pay me the whole amount shortly, I shall return to salem, and stay till they do.

即ち、「私は先週土曜日迄、1セントの金も受け取っていなかった。それから、20ドル丈け受け取った。そして当然、あなたが想像するように、私は非常に物悲しい、腹立たしさを受けている。彼等が、私にすぐに全額を払うのでなければ、私はサレムに帰り、そして、彼等が払う迄滞在するつもりです。」

しかし、会社は六月の初旬迄に債権者の要求に合うように、サミエルブレークに権利を分割し、ホーソンの立場は益々悪くなり、その位置に就いているのが困難になってくるのである。しかし、彼は八月迄その位置に就いていようと決心するのであるが、その辺の事情について、ターナーは次の様に述べている。

He stayed to see the August number through the press and then said farewell. The change in his attitude toward the magazine that had come about during his term as editor is pointedly evident when his remarks on his predecessor, Bradford, appended to the March issue are set beside his note of abdication in the August number.

即ち、「彼は出版物の八月号を見る為にとどまった。それから別れを告げた。彼の編集者としての期間中に出した雑誌に対しての彼の態度に於ける変化は、三月号の出版物に付加された前任者ブラッド、フォードについての彼の言葉が、八月号で彼の退職の説明文の傍に訳されている時、際立って明らかである。」

以上のように述べているが、更に、彼の心境の変化についてターナーは次の様に説明している。

At first he had an abundance of praise for Bradford and the policies of the magazine; six months later he made little attempt to veil his resentment against the Bewick Company and expressed the hope, possibly not altogether sincere, that the difficulties confronting the publication might not be insuperable.

即ち、「初めは彼はブラッドフォードや、雑誌の方針に対して非常に賞賛していた。其の6カ月後に、彼はビュイックカンパニーに対しての彼の怒りをおおい隠す事を殆んどしなかった。そして、必ずしも真剣と云う分けではないが出版に対しての困難は、克服出来るかも知れないと云う希望を表わした。」

以上のような決心をもって出版事業にたずさわったのであるが、其の仕事は決して楽なものではなく、凡ての点について相当の制限を受けていたようである。この事について、ターナーは次の様に述べている。

Hawthorne by no means had a free rein as editor. In the some eighteen numbers issued before he took charge, as well as in three distinct editorial pronouncements in the earlier pages of the magazine, the nature of the publication and also the policies and editorial methods had been established.

Furthermore, the engravings for each issue were chosen by the publishers. Not only was Hawthorne denied the right to reject even the worst of the illustrations, for all of which he was obliged to supply accompanying written matter, but it seems to have been the habit of the publishers to give him far from adequate notice of what embellishments they planned to use in each issue. Thus he was at times forced to provide, almost literally over night, commentaries on

topics he knew nothing about.

即ち、「ホーソンは決して編集者として、自由な統御力を持っていなかった。彼が受け持つ前に発刊された18号の中で、その雑誌の初めの頁の中の三つのはっきりした編集上の見解に於けると同様に、出版上の特徴や、編集方法等が又、建てられていた。その上に、それぞれの刊行物に対しての装飾が、出版人達によって選ばれた。彼が強いて、付加的に書いた事柄の凡てに対しての挿絵の最も悪い物を拒否する権利さえ否定されたのみならず、彼等が、どんな装飾をそれぞれの刊行物に任用するかについて、彼に強い注告を与える事が習慣であった様に見える。この様にして、彼は時々、何も知らない様な話題についての解説を、殆んど文字通り、徹夜で無理をして書いたのである。」

以上の様に、彼の編集者としての行動は、非常な制限を受けるのであり、ついに退く事になるのであるが、その辺の事情について、ターナーは、次の様に述べている。

Little wonder then that, when Hawthorne came to take his farewell of the magazine in his note at the end of the August number, he lamented openly that he had not been allowed full control over the contents and commented in particular that he had not been able to veto objectionable embellishments.

For the most part, Hawthornes editorial duties entailed the most depressing hack work. Following the policy already establishments, he filled each issue with quotations from books and periodicals, paraphrases or summaries of materials published elsewhere, with combinations of facts and statistics accumulated from various sources, with comments on the illustrations, the quotations, or the paraphrases; but occasionally he supplied accounts of his own observations and original essays.

## ナサニエル・ホーソンについての一考察（大森）

即ち、「ホーソンは八月号の終りの彼の注釈の中で、其の雑誌から離れるようになった時、彼が其の内容について、十分なコントロールを許されなかった事を公けに嘆き、そして特に、彼が好ましくない飾りを拒否する事が出来なかった事を述べた事は、当然だと思ふ。大部分ホーソンの編集の仕事は、最もやる気をなくさせる、つまらぬ仕事を課した。既に作られた方針に従って、彼はそれぞれの刊行物を、本や定期刊行物からの引用や、他の所で出版された資料の言い換えや、摘要や、種々の資料から集められた事実と統計との結合や、イラストや引用や、言い換え等についての意見で満たした。しかし時々、彼は彼自身の観察の記事や、独創的な論文を載せた。」

以上の様にターナーは述べているが、結局、ホーソンは相当の期待をもって、出版の仕事に関係したのであるが、実際、従事してみると、中々期待通りに行かず、失意の中に離職する事になるのであるが、しかし、有能な作家として世界的な評価を得ているホーソンに、こうした企業に関係した面もあった事は、注目すべき事柄と云えよう。

## む す び

1800年代に活躍した有名作家ホーソンについて、故金三津 俊明氏御使用の多くの参考書の中、それらの一部を参照しながら、ホーソンの故郷サレム、小説スカーレット・レターズ、又、出版の仕事等について、それらの一端を述べた次第です。最後に更めて、故金三津氏の御冥福を心より御祈り申し上げます。  
(1990. Aug.)

### 〔註〕

- (1) 故金三津 俊明氏 慈光院俊明日英居士(昭58. 6. 23死去)  
昭和25年8月21日 魚津市大町に誕生  
◇ 45年3月 富山県立上市高校卒業  
◇ 48年3月 立正大学文学部英文科卒業

ナサニエル・ホーソンについての一考察（大森）

- 昭和51年3月 同大学文学研究科博士課程修了  
ク 49年4月 日本アメリカ文学会会員  
ク 54年4月 拓殖大学，聖学院女子短期大学，城西大学，青山学院大学，各校講師  
ク 57年12月 日本ナサニエル・ホーソン協会会員

(2) ナサニエル・ホーソン

- 1804年 マサチューセッツ州セレムに生れる。一家はセレムに200年近く住む。  
1808年（4才）貿易船の船長の父が33才で病死，以後母エリザベスに育てられる。  
1821年（17才）ボストン大学入学，卒業時の成績は中程度。ピアスやブリッジ等と友情を結ぶ。  
1825年（21才）ボストン大学卒業，セレムに戻る。創作と読書に没頭する。実用的職業に就かない事を罪悪視する清教徳的罪悪感に苦しむ。  
1836年（32才）経済的理由から，ボストンの「アメリカン・マガジン」誌の編集者となったが，半年程で辞職。  
1837年（33才）大学以来の親友ブリッジの尽力で，「優しき少年」「予言の肖像画」等の短篇を出版，これはホーソン名で出した最初のものである。  
1838年（34才）ソフィア・ビーボディと婚約。  
1839年（35才）結婚の費用を得る為，ボストンの税関に勤務する。2年間の勤務中は創作活動は不振。  
1842年（38才）ソフィアと結婚。  
1844年（40才）長女ユーナ出生。  
1845年（41才）親友ブリッジの友情に感謝，「アメリカ巡航日誌」を出版。  
1846年（42才）家計が苦しい為，再びセレム税関に勤める。短篇を出版，長男ジュリアン出生，彼は長じて小説家となり，両親の伝記を著した。  
1849年（45才）税関を退職，母エリザベス（68才）を失う。最初の大作「緋文字」の制作にとりかかる。  
1850年（46才）「緋文字」を出版，非常に好評を得て，第一級の作家としての名声を確立した。  
1851年（47才）「七破風の屋敷」を出版，前作「緋文字」に劣らぬ好評を受ける。  
1853年（49才）友人のピアスが大統領に当選し，彼の好意でホーソンはリバアプールの領事に任命される。その間，各国を旅行し，「我等の故郷」「滯英日誌」を出版。  
1857年（53才）八月ピアスの大統領辞任と共に，ホーソンも領事を辞した。  
1860年（56才）「大理石の牧羊神像」を上梓，人間の罪が却って心を高める事も

ナサニエル・ホーソンについての一考察（大森）

ある、と云う問題を扱った。

1861年（57才）4月南北戦争が始まる。ホーソンは大きなショックを受ける。

1862年（58才）「戦争見聞記」を上梓。戦争を醒めた眼で眺めている内容である。

1866年（62才）旅行中に死去。

(3) ヘンリー・ジェームス

1843年 ニューヨーク市に生れる。

1865年 短篇「ある年の物語」を発表。

1871年 長篇「後見人と被後見人」を発表。

1876年 長篇「アメリカ人」をアトランティック・マンズリー誌に発表。

1878年 「フランスの詩人と小説家」「デイジーミラー」を出版。ジェームスの名声を高める。

1879年 ナサニエル・ホーソンの評伝を刊行。

1904年 20年ぶりにアメリカへ帰国。「黄金の盃」を出版。

1905年 イギリスに戻る。「イギリス紀行」を出版。

1911年 ハーバード大学より名誉学位を受ける。

1912年 オックスフォード大学より文学博士の名誉学位を受ける。

1914年 第一次世界大戦勃発、戦争に協力する。故国アメリカに対する失望から、英国に帰化することを決意し、イギリス国籍を得る。

1916年 死去、72才、遺骨は夫人の手で、アメリカに運ばれ、マサチューセッツ州のジェイムス家の墓地に納められた。

(4) ランダル・スチュワーツ (Randal Stewart) ブラウン大学教授 (アメリカ)

(5) 世界文学大系 (81) 筑摩書房東京, 1938

(6) アーリン・ターナ (Arlin Turner) アメリカ, ルイジアナ州立大学教授

参考書目

HAWTHORNE By Henry James: Cornell University Press, New York 1967

Nathaniel Hawthorne A Biography By Randall Stewart: Archon Books, America 1970

Hawthorne as Editor by Arlin Turner: Louisiana state University Press 1941

The Scarlet Letter introduction by: Roy Harvey Pearce: Everyman's Library, New York 1967

世界文学全集 (57) 集英社 東京 1936

世界文学大系 (81) 筑摩書房 東京 1938